

谷崎潤一郎「美食倶楽部」論

——「美食」を語る裏にあるもの——

小林 珠子

1

谷崎潤一郎「美食倶楽部」(一九一九(大正八)年『大阪朝日新聞』)は、美食倶楽部の会員である「G伯爵」が、「美食」の享受者から、提供者へと変貌するさまを描いた物語である。「G伯爵」をはじめとする、美食倶楽部の会員たちは、「平凡な「美食」」には何の感動も覚えなくなっていた。「狂ひ死に死んでしまふ音楽にも似た」、「美食」を求めていた「G伯爵」はある晩、「浙江会館」という建物を発見する。「浙江会館」では、「熱心なガストロノマア」である支那人達の「宴会」が催されていた。この「宴会」を目にした後、「G伯爵」は美食の享受者から提供者へと姿を変える。

「美食倶楽部」は、谷崎の〈支那趣味¹⁾〉の作品の一つであり、美食家で大食家の谷崎が「あくなき食への関心²⁾」を描いた代表作と位置づけられてきた。しかし、「美食倶楽部」に描かれるのは、「食への関心」だけではない。本作では「食への関心」と同時に、谷崎の「言葉への関心」が展開されているのである。³⁾本作で展開される「言葉への関心」がいかなるものか、本文に沿いながら、考察していこう。

作者は、G伯爵がその晩その阿片喫煙室の穴から見たところの隣室の宴会の模様を、茲に精しく述べなければならぬ義務がある。が、その会の会長が参会者の人選を厳密にすると同じ意味で、読者の人選を厳密にすることが出来ない限り、その模様を赤裸々に発表することが出来ないことを遺憾とする。たゞ、その一晚の目撃に依つて、どれほど伯爵が平素の渴望を癒し得たか、さうしてその後、料理に対する伯爵の創意と才能とが、どれほど長足の進歩を遂げたか、それを読者に報告することにしよう。

伯爵が、いかに「平素の渴望」を癒し、料理に対する「創意と才能とが、どれほど長足の進歩を遂げたか」を読者へ「報告」するために、「作者」は、G伯爵が主催した「美食の会」の「献立」を書き記していく。

先づ第一夜の宴会の献立から、順を追うて次に書き記してみよう。

清湯燕菜	鶏粥魚翅	蹄筋海参	烧烤全鴨	炸八塊
龍戲球	火腿白菜	拔絲山菜	玉蘭片	雙冬筍

「献立」とは、料理の内容を知るためにある。「献立」は、料理の内容を正しく伝えてこそ、意味を持つものだ。しかし、「作者」がここに示した「献立」から、料理の内容を推測できる読者がどれだけいるだろうか。真鍋正宏は、「ここに列挙させる料理の名は、ありふれた中華料理店の菜單にもよく見られるところのものである⁴」と指摘する。しかし後藤朝太

郎は『支那料理通』で、次のように指摘する。

支那料理が滔々として世界的に歓迎されて来た今日であつても、日本の家庭に於ける婦人達の間には、敢てまだ旧式の女性とは言はぬが、支那料理とさへ云へば聞いただけで胸がムツトして悶へ、変な気持ちになるなどと云つて、ハシカチを口に押し当てる婦人さへ見受けることがあるのである。⁵⁾

『支那料理通』が出版されたのは、一九二九（昭和四）年。庶民的な支那料理が広まる一方、支那料理に対する偏見はまだ根強く残っていたことが分かる。「平凡な「美食」に飽きた「倶楽部の会員達」が集う、「美食の会」に供される料理は、庶民的なものでなく、高級な支那料理であろう。「美食倶楽部」が発表される前年（一九一八（大正七）年）日本では、第一次世界大戦の影響で、米価が高騰し、大規模な米騒動が起きていた。⁶⁾米価だけでなく、物価全体が高騰し、人々の暮らしは困窮を極めていた。このような時代状況において、多くの読者は「献立」を正しく読むこと、「献立」から料理内容を想像することは困難だったのではないだろうか。

「献立」に翻弄されるのは読者だけではない。宴会に参加している「倶楽部の会員達」、支那料理の通人である彼らもまた、「献立」と、供された料理の見た目との懸隔に、一瞬とまどいを覚えるのである。「倶楽部の会員達」が覚えたとまどいは、実際に料理を賞味することで解消される。

たとへば其の中の鶏粥魚翅けいしゆくぎよしの如きは、普通に用ふる鶏のお粥でもなければ鮫の鰭でもなかつた。たゞどんよりとした、羊羹のやうに不透明な、鉛を融かしたやうに重苦しい、素的に熱い汁が、偉大な銀の井の中に一杯漂うて居た。人々は其の井から発散する芳烈な香氣に刺激されて、我れ勝ちに匙を汁の中に突込んだが、口へ入れると意外にも葡萄酒

のやうな甘みが口腔へ一面にひろがるばかりで、魚翅や鶏粥の味は一向に感ぜられなかつた。

「何だ君、こんな物が何処がうまいんだ。変に甘つたるいばかりぢやないか。」

さういつて気早やな会員の一人は腹を立てた。が、その言葉が終るか終らないうちに、其の男の表情は次第に一変して、何か非常な不思議な事を考へ付いたか、見付け出しでもしたやうに、突然驚愕の眼を睜つた。と云ふのは、今の今まで甘つたるいと思はれて居た口の中に、不意に鶏粥と魚翅の味とがしめやかに舌に沁み込んで来たのである。

真鍋正宏は、「これら料理は、実はその実存性さえ疑わしいものばかりである。これらは、読者の想像力を刺激するための、いわば言葉の遊び」であり、読者は「言葉だけで、その料理を想像する喜びを味わおうとするようになってい。おそらくこれが、この小説が目指した到達点であろう」と指摘する。たしかに、料理を実際に賞味できない読者にとって「言葉」は、料理を「想像」する唯一の道具である。しかし「献立」の「言葉」から、「料理を想像する喜び」は、すべての読者に与えられているわけではない。もう一度、「献立」に目を通していただきたい。「献立」は、漢字、中国語で書き記されている。見慣れない文字の羅列を目にした時、「読者の想像力」は「刺激」され、「喜び」を味わうことが出来るだろうか。たとえば、漢文や日本の古典文に馴染のない人が、原文から「想像力」を「刺激」され、話の内容を想像する「喜び」を感じるだろうか。

少し時代は下るが、正宗白鳥は Arthur Waley による『源氏物語』の英訳を読んだ際、次のような発言をしている。

紫式部の原文を読むと、今の私にも、なほ名文とは思はれない。二三枚も読むと巻を投じたくなるほどに頭脳の倦怠を覚える。人物や事件の印象も、甚だ不鮮明である。私は略三分一ばかりは、訳文と原文とを照らし合わせて見た。

翻訳といふものも面白いものである。千年も前の読みづらい日本の古典が、現今の英文に化して明快に我が心に映つ

てくるのは、愉快である。⁽⁸⁾

白鳥は、「読みづらい」原文では、「巻を投じたくなるほどに頭脳の倦怠を覚えた」と述べる。難解な言葉は読者の想像力だけでなく、物語を読み進める気力さえも削いでしまう可能性を有しているのだ。「献立」の記述から、料理を想像する喜びを得られるのは、ある程度漢字や中国語を読解する能力のある読者、支那料理に通じた読者だけなのである。「献立」の「言葉」は、読者の想像力を刺激するためではなく、「厳密」なる「読者の人選」を行うための道具だったのだ。

3

なぜ「作者」は、「言葉」による「読者の人選」を行ったのであろうか。「美食倶楽部」が発表された年、大規模な米騒動が起ったことは既に述べた。米騒動問題に伴い、「言葉」に関する一つの事件が惹き起こされた。白虹筆禍事件である。この事件は、米騒動が全国へ拡大することを恐れた寺内内閣が、一九一八（大正七）年八月十四日、新聞、雑誌へ、米騒動に関する記事掲載を禁止する旨を通告したことに端を発する。八月十五日『大阪朝日新聞』は「寺内内閣は斯の如き理由の下に各地の米騒動に関する一切の記事掲載を禁止せり」と見出しをつけ、この決定について次のように記す。

各地騒擾に関しては我社は敏速なる報導をなし来りしも突然内務大臣の命令によりて報道禁止の止むなき事情に立至つた。我社は内務当局の弁明を聴き読者に対して消息を明かにする義務がある、十四日夜午後九時四十分頃突如築地警察署の通告として「米価に関する各地の騒擾に関係のある記事、及び大阪の騒擾に関する号外を発行する事の二項を禁止し且つ内務省に都下各新聞各通信社を請じ水野内相は小橋次官、永田警保局長列席の上禁止の理由を述べた」⁽⁹⁾

『大阪朝日新聞』の記者は、政府関係者による「禁止の理由」を述べた後、新聞読者に対し「一切報道の自由を奪われた」ことを記す。政府の決定を「暴政」と見た記者たちは、八月二十五日大阪ホテルにて、関西記者大会を開催した。この会の様子が八月二十六日『大阪朝日新聞』に掲載された。

食卓に就いた来会者の人々は肉の味酒の香に落ちつくことが出来なかつた、金甌無欠の誇りを持つた我大日本帝国は今や恐ろしい最後の裁判の日に近いといふものではなからうか、『白虹日を貫けり』と昔の人が呟いた不吉な兆が黙々として肉叉を動かしてゐる人々の頭に電のやうに閃く¹⁰⁾

会のなかで発せられた「白虹日を貫けり」という言葉が、朝憲紊乱にあたるとし、『大阪朝日新聞』が告訴されたのが、白虹筆禍事件の全貌である。『大阪朝日新聞』に有罪判決が下されたのが、十二月四日。そして「美食倶楽部」の連載が『大阪朝日新聞』紙上で開始されるのが、翌年（一九一九（大正八）年）一月六日である。『大阪朝日新聞』の読者が、「美食倶楽部」という言葉から、米騒動を発端とした「白虹筆禍事件」を連想するのは、それほど難しいことではないだろう。「美食倶楽部」のなかで、「G伯爵」は、「会長の陳さん」に、「警察の刑事だと」思われる。その結果、伯爵は「陳さん」の主催する「宴会」には、参加することが出来ない。

「倶楽部の会員達」は、「みんな怠け者ぞろひで、賭博を打つか、女を買うか、うまいものを食ふより外に何等の仕事をも持つては居なかつた」。金と自由を持って余した会員達の姿は、一般市民からはほど遠いものだろう。「美食」に耽る会員達の姿は、「東坡肉の材料になる豚の肉」のような体を持ち、「暗闇へ入れられてうまい餌食をたらふく食はせられる鷲」に例えられる。「美食」に興ずるあまり、自ら食材と化していることに、会員達は気づかない。G伯爵ははじめ、ほかの会員同様、「美食」を享受する側に属していた。G伯爵を「食材」から、「コック」へと変えたのは、「浙江会館」での体験だ。

支那人との出会いがなければ、G伯爵もまた「食材」にとどまり続けていただろう。

G伯爵が主催する「美食の会」に参加する会員達は、「此の頃では、彼等は最早美食を「味はふ」のでも「食ふ」のでもなく単に「狂」って居るのだとしか見受けられない。気が違ふか病死するか、彼等の運命はいづれ遠からず決着する事と作者は信じて居る」と語られる。「食材」と化していることに気づかない会員達は、知らず知らずのうちに、自らの命を「消費」させていく。「厳密」なる「人選」を通過した「倶楽部の会員達」。彼らを待ち受けるのは、「気が違ふ」か「病死」である。本来「食事」とは、生命を維持するためのものである。しかし、会員達は「美食」に耽るほど、「死」へと近づいていく。

「献立」の言葉が、「読者の人選」のために行われていることは既に述べた。「美食倶楽部」が発表された当時、読者の多くは米価高騰、物価高騰により、苦しい生活を強いられていた。「人選」に通過し、「美食」の数々を賞味する「倶楽部の会員達」。彼らは、「人選」に通過したがゆえに、命を縮めていく。「言葉」による「人選」には、選ばれし美食家が、食べれば食べるほど、命を「消費」するという皮肉が込められているのである。

後年谷崎は、「美食倶楽部」を自選全集におさめなかつた。¹²⁾ 政府の言論弾圧に対する諷刺、それが露骨に表れたために、谷崎は、本作を全集へおさめることを避けたのだろう。鈴木修次は中国文学の意識のなかには、「政治と無縁であつてはならない」という考えがあるという。「美食倶楽部」には、「白楽天」、「蘇東坡」が登場する。幼少期から漢詩文に親しんでいた谷崎は、中国を旅するなかで、漢詩文の本質に触れ、「諷刺」の精神を学んだのではないだろうか。¹³⁾

西原大輔は、谷崎の中国観について、次のように指摘する。

夢と幻想の国としての肯定的中国像は、中国社会を静止的なものとして理解しようとする否定的な見方とは、一見矛盾するように見えて、じつはコインの表裏の関係になっている。中国は古代がそのまま現代に残っている国であり、それゆえに醜悪な近代に浸食されることなく、エキゾチックな美が保存されたと、谷崎は考えていたものと思われる。¹⁵⁾

たしかに「古代」の「エキゾチックな美が保存」されていたことが、谷崎を中国に惹きつけた理由のひとつであろう。しかし谷崎は決して、「近代」を「醜悪」なものと考えてはいない。谷崎にとって、「古代」の「エキゾチックな美」と、「近代」はともに必要なものであり、この二つが両立した世界が谷崎の理想とする世界なのである。

谷崎は「美食倶楽部」を発表する前年（一九一八（大正七）年）、中国を旅行している。その時の感想を「東京を思ふ」で、次のように述べている。

大正七年に私が支那に遊んだのは此の満たされぬ異国趣味を纔に慰めるためであつたが、旅行の結果は私を一層東京嫌ひにし、日本嫌ひにした。なぜなら、支那には前清時代の倂を伝へた、平和な、閑静な都会や田園と、映画で見る西洋のそれに劣らない上海や天津のやうな近代都市と、新旧両様の文明が肩を並べて存在してゐた。過渡期の日本は

その一つを失つて、他の一つを得ようともがいてゐる時代であつたが、自分の国の中に租借地と云ふ「外国」を有する支那に於いては、此の二つが相犯することなく両立してゐた。¹⁶

谷崎が中国に惹かれたのは、「新旧両様の文明が肩を並べて存在してゐた」からである。古くからある自国の伝統と、新たに外国から取り入れた文化がお互いに潰しあうことなく、共存する世界。「過渡期の日本」では実現されなかつた、「新旧両様の文明」の共存が、中国では成し遂げられていた。「日本よりもはるかに長い、長い歴史を持つ中国」、「長い歴史の中で育まれた中国の文化は」、「近代」と「肩を並べる」だけの強さを有していた。谷崎が中国に惹かれたのは、「近代」と対等に「肩を並べる」ことのできる「文明」、「近代」に呑み込まれることのない、文化大国としての強さを有していたからだ。

「美食倶楽部」に登場する、「浙江会館」の門の柱に掛けられた「看板」は次のように記される。

看板は極めて古ぼけた白木の板で、それへ散々雨曝しになつたらしい墨色の文字が、ほんやりと、しかしいかにも支那人らしい雄健な筆蹟で大きく記されて居た。

この看板と「反対の門の柱」には、「Night Bell」と云ふ英語と、「御用の御方は此のベルを押して下さい」と云ふ日本語とが、名刺大の白紙に記されて「貼られている。ここには、支那と、日本、西洋の文化面での力関係が示されている。「古ぼけ」ながらも、「支那人らしい雄健な筆蹟」を残す、「浙江会館」の「大き」な文字。一方、「Night Bell」という英語と、「御用の御方は此のベルを押して下さい」という日本語は、「名刺大」の小さな「白紙」に記される。文字、文化の面では、中国が日本、西洋よりも上位にあることを、「浙江会館」の「看板」は示している。

また、「浙江会館」でG伯爵は、支那人と次のような会話をする。

「それぢや会長は私を怪しい人間だと思つてゐるんですね。そりやあ御尤もです。用もないのにこの路地へ這入つて来て、家の前をうろくして居たのですから、怪しいと思へば怪しいに違ひありません。私は自分でも可笑しいと思つて居るくらゐです。しかしこれにはいろいろの理由があるので、説明しなければ分りませんが、実は我々は美食俱樂部と云ふのを組織して居ましてね、……」

「何？ 何の俱樂部ですか？」

支那人は変な顔をして首を傾げた。

「美食です、美食俱樂部です。—『The Gastronomer Club』」

「あ、さうですか、分りました、分りました。」

さう云つて支那人は人が好き、うに笑ひながら頷いて見せた。

「明瞭な日本語」を話す支那人に、「美食俱樂部」という日本語は通じず、「The Gastronomer Club」という英語によって、「美食俱樂部」の内容が理解されるのだ。日本語よりも、英語の方が支那人にとって身近なものであることが、ここでは示される。また、「浙江会館」では、「日本人の奉公人」が支那人に雇われている。「美食俱樂部」では、日本が支那、西洋に劣つたものとして描かれている。

冒頭で、「美食俱樂部」は、谷崎の〈支那趣味〉の作品の一つであると紹介した。川本三郎は『大正幻影』で、大正作家たちが、〈支那趣味〉へ向かったことに対して次のように述べている。

「支那」は日清戦争で日本に敗れた。かつてあれほど日本人の文化意識の上位にあった「支那」が軍事的には日本に敗れた。この日清戦争の力関係抜きには「支那趣味」を語ることはおそらく出来ない。「支那趣味」は、日清戦争に勝利した日本人の優越意識と、その裏に隠された文化的コンプレックスの複雑な融合意識である。¹⁷

日本は、日清、日露、第一次世界大戦と戦争を繰り返すことで、近代化を果してきた。軍事面では中国の優位にありながら、文化面では中国と「肩を並べる」ことが出来なかった。谷崎は、一九一八（大正七）年の中国旅行を通し、日本の文化が中国に遠く及ばないことを痛感したのである。しかし、「美食倶楽部」では、文化面で、日本が中国に比肩する可能性を示唆し、物語が閉じられる。

つゞいて其の明くる晩、第二夜の饗宴が同じ倶楽部の会場に於いて開催された。作者は其の夜の献立を一々此処に列挙する事の煩を避けて、其の中の最も奇抜なる料理の名前と、その内容を説明しよう。

即ち其れは

高麗女肉

と云ふ料理である。第一夜の献立に於いては、料理の内容は兎に角、名前だけは純然たる支那料理だつたのに、高麗女肉と云ふのは支那料理にも決してあり得ない珍しい名前である。

G伯爵は、「支那料理にも決してあり得ない名前」を持つ「美食」を考案する。第二夜以降の「献立」は、支那料理の本場である中国にもない、「珍しい名前」が並べられる。「浙江会館」での支那人との交流によって「美食法」の知識を得たG伯爵は、支那人も考えつかなかった「美食」を生み出すのである。これは決して、「軍事的」に中国に勝利した日本が、

「文化面」においても中国に勝利したというわけではない。谷崎の理想はあくまで、「比肩」し、共存することであり、「支配」することではない。

谷崎作品にはこの後も、中国の古典文学が引用されていく。幼少期から晩年まで、谷崎は中国文学の影響を受け続けた作家である。谷崎は一九二六（大正十五）年、再び中国を訪問し、念願だった中国文学者との交流をもつ。この経験が、昭和初年代の〈古典回帰〉と呼ばれる作品群に影響を与えたと考えるが、それについては稿を改めたい。

注

- (1) 「支那趣味」とは、大正期にみられる、「一種の「新しい流行」」を指す。川本三郎は「大正の「支那趣味」とは明治の「漢文」を楽に読む」青年への敬意に基づいたひとつのルネサンス。だったと考えることが出来る。もう一度「漢文」「支那文学」を読みかえそうという古典への回帰・古典の復興であり、西洋化・近代化に対するささやかなアンチテーゼである」（一三八頁）と定義する。（川本三郎『大正幻影』、新潮社、一九九〇・七。西原大輔は「支那趣味」を「大正時代を中心とした、中国文化に対する異国趣味的関心の総体を指す」（二二頁）と定義し、谷崎の「支那趣味」の作品には、「オリエンタリズム」の要素があると指摘する。西原は「オリエンタリズム」を「植民地をもつ帝国による、被支配国並びにこれに類する地域に関する言説を広く含む概念」（一九頁）と定義している。（西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム―大正日本の中国幻想』、中央公論社、二〇〇三・七）

(2) 千葉俊二編『別冊国文学 谷崎潤一郎必携』、二〇〇一・十二 三六頁

(3) 谷崎の食談義に関しては既に、「文章が単なるグルメ自慢やレストラン評にとどまらず、一種の文化論に発展してゆく」という評価がされている。（『別冊国文学 谷崎潤一郎必携』三七頁）

(4) 真鍋正宏「大正の美食／「美食倶楽部」―食通小説の世界（四）―」（『人文学』（二六七）、二〇〇〇・三）また真鍋は、『食べ物時代相』、『支那料理通』などから、「大正末期から昭和初期にかけての時期には、東京には一流の中華料理店が既にいくつも存在し、またこれを味わう通人もいた」。「これら通人たちは、廉価な支那蕎麦を求めたのでは決して無く、おそらくその融通無碍

なる料理法が可能にする珍味を求めたのであろう」と述べる。しかし、「美食倶楽部」の読者の中に、どれだけ支那料理の「通人」がいたのだろうか。多くの読者は、「第一夜」の「献立」の記述だけでは、料理の内容を想像することすら難解だったのではないだろうか。

(5) 後藤朝太郎『支那料理通』（四六書院、一九三〇・一）六頁

(6) 米価高騰の原因として、シベリア出兵をあて見込んだ米穀大商人たちの買占め、大戦による好況で、大都市の人口や諸工業の労働者が激増し、それまで米のかわりに麦やひえ等を用いていた農家の米の消費量が増えたという需要の変化がある。米騒動が全国に広がったのは、生活苦だけでなく、成金や富豪に対する反感、政府に対する不信感がその底流にあったと指摘する。(株式会社アカデミー編『増補改訂 物価と風俗一三五年のうつり替わり―明治元年―平成一三年―』、同盟出版サービス、二〇〇一・九) 一八五頁

(7) 真鍋正宏 前掲論文

(8) 正宗白鳥「再び英訳『源氏物語』につきて」(『正宗白鳥全集』第二十二卷、福武書店、一九八五・四)

(9) 「寺内内閣は斯の如き理由の下に各地の米騒動に關する一切の記事掲載を禁止せり」『大阪朝日新聞』(一九一八・八・十五朝刊) 七頁

(10) 「寺内内閣の暴政を責め猛然として弾劾を決議した関西記者大会の痛切なる攻撃演説」『大阪朝日新聞』(一九一八・八・二十六夕刊) 二頁

(11) 「美食倶楽部」『大阪朝日新聞』(一九一九・一・六夕刊) 一頁

(12) 土佐亨「谷崎文学典拠雑考―「人面痘」「美食倶楽部」「青塚氏の話」―」(『金沢大学語学・文学研究』第十号、一九八〇・二)

(13) 鈴木修次は、「毛詩」の序において説明されたこの「風雅」の考え方は、以後の中国文学の意識の中に一貫して継承された。ほんとうの文学は、政治と無縁であってはならない、政治の問題を回避することなくとりくむもの、それが「風雅」の文学であり、よりよき文学なのだ、と中国の人は考え、「風雅」の姿勢の中に、中国における正統的な文学精神があるのだと考えたと指摘している。(鈴木修次『中国文学と日本文学』東京書籍、一九七八・九) 二十一頁

(14) 谷崎は「上海交遊記」のなかで、「此の前、大正七年に支那へ来た時、北京でも上海でも新しい文士創作家に会ひたいと思つて、

いろ／＼手蔓を求めて見たが、その時分の中華民国には、さう云ふ人は一人もなかつた。「誰か有名な小説家か戯曲家は居ないだらうか」と云ふ問ひに対して、「目下の支那はまだ近代的の文学が勃興する機運に進んでゐない。青年の志は多く政治に傾いてゐる。たま／＼小説を書く者があつても、それらは大概新聞記者が片手間にやる仕事で、その小説も主に政治小説である」と云ふのが、或る支那人の答へであつた。詰まり当時は、日本で云へば「佳人の奇遇」や「経国美談」の時代であつた。だから勿論われ／＼の名前が知られてゐよう筈はなく、況んやわれ／＼の作物の翻訳物がある訳はなかつた」と述べている。（『谷崎潤一郎全集』第十卷、中央公論社、一九八二・二）

(15) 西原大輔 前掲書 一三五頁

(16) 『谷崎潤一郎全集』第二十一卷（中央公論社、一九八三・一）

(17) 川本三郎 前掲書 一四六頁

〔付記〕

「美食倶楽部」の本文の引用については、『谷崎潤一郎全集』第六卷（中央公論社、一九八一・十）を使用し、旧漢字については適宜改め、旧かなは本文のままとしている。

（博士前期課程）